

聖書を学ぶことが本当に楽しそうで自分も是非学んでみたいと思っていただく良いアイデアはありませんか？

あります。むしろ「聖書を学びましょう」と直接勧めるより、「聖書って、こんなことまで答えてくれるの？」という知的なワクワクを生み出す方が、自然に「もっと調べたい」に結び付きやすいと思います。

特に効果がありそうなのは、次のようなアイデアです。

1. 「答え」ではなく「謎」を一つ渡す

例えば、

「もし神が人間を愛しているなら、どうしてこんなに苦しみが多いんだろう？」

と問い掛けて、

「実は聖書には、この疑問についてかなり筋道の通った説明があるんです。」

とだけ伝える。

答えを全部説明しないのがポイントです。

「それ、どんな説明？」となれば、もう聖書への興味が生まれています。

2. 「自分の人生に関係する質問」を選ぶ

聖書を「昔の宗教の本」と感じている人には、

- 幸せな人生とは何だろう？
- なぜ人間は愛されたいのだろう？
- 人生には本当に目的があるのだろう？
- 苦しい経験には何か意味があるのだろう？
- 死んだらどうなるのだろう？
- 良い人なのに、なぜ苦しむのだろう？
- 人間関係をどうすれば良くできるだろう？
- 将来、世界はどうなるのだろう？

など、本人が既に心の中で持っている質問から入ると面白くなります。

「聖書を勉強する」のではなく、

「自分の疑問を聖書で調べてみる」という感覚です。

3. 「聖書には宝探しのような面白さがある」と感じてもらう

これはかなり大切だと思います。

例えば、

「聖書って、最初から全部読まなくても面白いですよ。疑問を1つ決めて、それに関係する聖句を調べていくと、別の聖句とつながってくるんです。」

そして実際に、

質問 → 聖句 → 別の聖句 → 新しい発見

という流れを一緒に体験してもらう。

すると、

「なるほど！ここがこうつながっているのか！」

という**発見の喜び**が生まれます。

4. 「一緒に調べる」という姿勢にする

「私が聖書を教えます」より、

「これ、私も面白いと思ったんですが、一緒に調べてみませんか？」

の方が心理的なハードルが低いでしょう。

特に、

「この聖句はどういう意味だと思いますか？」

と相手に考えてもらう。

そして相手が発見した時に、

「そう考えると、次の聖句ともつながりますね。」

と進める。

教わる人ではなく、発見する人になってもらうわけです。

5. 「たった5分で一つ発見する」

「聖書を学ぶ」と聞くと、「大変そう」「時間がかかりそう」と思う人もいます。

そこで、

「5分だけ、聖書から人生について一つ面白い答えを探してみませんか？」

という入り方も面白いと思います。

例えば、

「本当の幸福は何から生まれる？」

という一つの質問だけ。

短時間で、

質問 → 聖句 → 自分の生活との関係

まで到達できれば、

「これならもう少し調べてみたい」

となりやすいです。

6. 「聖書を読むと自分自身が見えてくる」という体験

これは非常に深い魅力だと思います。

例えば、

「聖書って、神について書いてある本だと思うでしょう。でも読んでみると、自分がなぜ怒るのか、なぜ人から認められたいのか、なぜ人を許せないのか……自分自身のことまで見えてくるんですよ。」

という切り口です。

そして、

「聖書を知る」＝「自分を知る」

という面白さを体験してもらう。

7. 「1つの聖句からどこまで広がるか」を見せる

例えば「愛」というテーマなら、

愛 → 憐れみ → 許す → 感謝 → 喜び → 人に仕える → 幸福

と、どんどん別の聖書の考えにつながっていきます。

以前お話しした**アガペー愛**なども、まさにそうですね。

一つの言葉を深く調べるだけで、

「えっ、こんなにいろいろな考えにつながっているの？」

となります。

そして、一番大切なのは

「聖書を学ぶと楽しいですよ」と説明するより、「聖書を調べると楽しい」という体験を実際にしてもらうことだと思います。

例えば伝道で、

「聖書って、人生についてかなり意外なことを言っているんですよ。よかったら一つだけ、一緒に調べてみませんか？」

そして相手自身に聖句を読んでもらう。

その後、

「この言葉、今の生活に当てはめるとどう思いますか？」

と尋ねる。

ここで相手が**自分で発見した瞬間**が生まれれば、それが「もっと知りたい」の種になります。

私は、聖書への関心を高める上で、

「説得」より「発見」、

「説明」より「質問」、

「勉強」より「宝探し」

という3つの転換が、とても強力だと思います。

そしてこれは、聖書の「隠された宝を探すように探し求める」という考え方とも、とてもよく合っています。

日本では、「宗教」や「キリスト教」という表現への偏見も根強く、「洗脳されるのでは？」「騙されるのでは？」などの恐れという大きな障壁が立ちはだかつて、関心を持つところまで至らない方がほとんどだと思います。この障壁を少しずつでも崩していく良い方はあるでしょうか？

はい。ここはかなり重要なポイントだと思います。

「聖書に興味を持ってもらう」前に、まず**「この人は自分をコントロールしようとしているのではない」**という安心感を作る必要があります。特に日本では、宗教そのものへの警戒心が先に働く場合があるので、いきなり教理を説明するより、信頼→安心→好奇心→自分で確かめるという順番が自然でしょう。

1. 最初から「信じてください」としない

むしろ、

「信じるかどうかは別として、一度聖書そのものを読んでみませんか？」

という姿勢です。

これはかなり大きな違いがあります。

「私の言うことを信じてください」ではなく、

「自分で読んで、自分で考えて、自分で判断してください」

という立場を明確にする。

これだけでも「洗脳されるのでは？」という不安をかなり和らげられると思います。

2. 「質問してもいい」という空気を作る

警戒している人ほど、

「疑問を持ったら怒られるのでは？」

と感じるかもしれません。

そこで、

「聖書について、納得できないことは何でも質問して大丈夫ですよ。」

「むしろ疑問がある方が面白いと思います。」

と言えるといいでしょう。

そして実際に、難しい質問に対して無理に答えを作らず、

「それは面白い質問ですね。私も調べてみましょう。」

と言う。

「何でも知っている人」ではなく「一緒に調べる人」になるわけです。

3. 「宗教」という言葉から入らない

これはかなり有効だと思います。

例えば、

✕「聖書の勉強をしませんか？」

より、

○「人生について聖書がどんな答えを出しているか、一つ調べてみませんか？」

の方が心理的な抵抗が小さいでしょう。

つまり、

宗教 → 聖書 → 人生

ではなく、

人生の疑問 → 聖書を調べる → 必要なら宗教について考える

という順番です。

4. 「自由にやめられる」ことを実際の態度で示す

これは言葉以上に強いと思います。

例えば、

「今日はここまでにしましょう。」

と言われたら、

「もちろんです。また興味が出たらいつでも。」

と気持ちよく終わる。

何度も誘ったり、断られても説得し続けたりしない。

すると相手の中に、

「この人たちは、私の意思を尊重してくれる」

という経験が積み重なります。

そして面白いことに、自由を尊重されると、自分から知りたくなる余地が生まれるんですよね。

5. 「聖書を調べること」と「組織に加入すること」を分ける

ここも重要です。

最初から、

「教会に来ませんか」

「集会に来ませんか」

「宗教を始めませんか」

となると、警戒する人もいるでしょう。

それより、

「まず聖書のこの部分だけ、一緒に見てみませんか。」

とする。

「聖書を調べるだけなら、自分で判断できる」

という感覚を持ってもらうことです。

6. 「あなたを変えたい」ではなく「あなたの疑問を大切にしたい」

この違いは非常に大きいです。

例えば、

「聖書を学べば人生が変わりますよ。」

よりも、

「今、人生について何か気になっていることはありますか？」

と聞く。

そして相手が、

「将来が不安です」

と言ったら、

「そうなんですね。実は聖書には将来についてかなり具体的なことが書かれています。よかったら、その部分だけ一緒に見てみませんか？」

となる。

これなら、相手の必要から出発しています。

7. 最も強い「反洗脳対策」は、考える力を育てること

ここは特に大切だと思います。

本当に聖書を学ぶことを勧めるなら、

「私が言ったから信じる」

ではなく、

「聖書に何と書いてあるか、自分で確かめる」

という習慣を育てることです。

例えば、

「この教えは聖書のどこに書いてありますか？」

「前後の文脈を見るとどうでしょう？」

「別の聖句ではどう言っていますか？」

と、一緒に確認する。

そうすると聖書の学習そのものが、受け身の洗脳ではなく、自分で調べ、比較し、考える活動になっていきます。

そして私は、これまでお話ししてきた「聖書の宝探し」と、この点が非常につながっていると思います。

最初から、

「宗教を信じてもらう」

ことを目標にするのではなく、

「この人が安心して、自分の疑問を自分で調べられる環境を作る」

ことを目標にする。

その中で、

「えっ、聖書ってこんなことを言っているの？」

↓

「これは自分の人生にも関係があるかもしれない」

↓

「もう一つ調べてみたい」

↓

「もっと聖書を知りたい」

となれば、とても自然です。

そして何より、相手が「説得された」のではなく、「自分で発見した」と感じる事が大切なのだと思います。

これは、以前お話しした「聖書の中の宝を見つける楽しさ」と、まさに同じ方向を向いています。

あと、人の目を、つまり人からの評価をととても気にするという日本人の特性も大きな障壁になっていると思います。この特性に上手く対処する方法はありますか？

はい。これはかなり重要な視点だと思います。

ただ、「日本人はみんなそうだ」と決めつけるより、日本では周囲との調和や「人からどう見られるか」を気にする場面が比較的強く出ることがある、くらいに捉えるのがよいでしょう。

聖書に関心を持つことについても、

「聖書を読んでいると思われたら、変な人だと思われませんか」
「宗教に入ったと思われませんか」
「家族や友人に何と言われるだろう」
「職場で知られたらどうしよう」

という**「内容への抵抗」ではなく「周囲の評価への恐れ」**が障壁になることがあります。

ここでは、説得するよりも、その心理的な負担を小さくすることが大切だと思います。

1. 「人にどう思われるか」から「自分はどうか」へ

例えば、

「周りの人がどう思われるかはさておき、もし誰にも知られないとしたら、聖書についてちょっと調べてみたいと思いますか？」

これは面白い質問です。

「宗教は嫌い」と答えていた人でも、

「誰にも知られないなら、ちょっと興味はある」

ということがあります。

つまり、本当の障壁が聖書そのものではなく、他人の評価だと分かります。

2. 「今すぐ何かを決めなくていい」と伝える

人は「一度関わったら後戻りできない」と感じると警戒します。

ですから、

「もちろん、聖書を一度調べたからといって、何かを決める必要はありませんよ。」

という安心感は大きいでしょう。

「知ること」と「決断すること」を分離するわけです。

これは先ほどの「洗脳されるのでは？」という不安への対応ともつながっています。

3. 「人に見せるための宗教」ではないことを示す

聖書そのものにも、人からの評価を過度に気にすることへの警告があります。

例えばイエスは、宗教的な行為について、

「人に見られるために人前で行わないように注意しなさい」

という趣旨を教えています。(マタイ 6 章)

これは興味深いですね。

つまり聖書は、

「人からどう見られるか」より「神との関係や自分の内面」を重視する

方向へ人を導いています。

ですから、

「聖書って、実は『人からどう見られるか』に振り回されない生き方についてもかなり考えさせられるんですよ。」

という入口も作れます。

4. 「みんながどうしているか」ではなく「あなたは思う？」と聞く

日本では、

「普通はこうですよ」

という基準が強く働くことがあります。

そこで聖書を読んだ後に、

「一般的にはどう考えるかではなく、あなた自身はこの言葉をどう感じましたか？」

と聞く。

これは小さいようで、かなり重要です。

「周囲の意見」から「自分自身の良心・思考」へ視点を移す練習になるからです。

5. 「少数派でも大丈夫」という安心感を作る

興味深いのは、人は「自分だけが違う」と感じると急に不安になることです。

ですから、

「最初から全部理解する必要はありませんよ。」
「疑問を持ちながら調べている人もたくさんいます。」
「自分で納得できるまで考えていいんです。」

という雰囲気を作る。

「正解を早く言わなければならない」というプレッシャーをなくすことが重要です。

6. そして、実は「人の目を気にすること」を否定しない

ここが一番大事かもしれません。

「そんなに人の目を気にしなくていいですよ」と言ってしまうと、

「いや、それができないから困っているんです」

となります。

むしろ、

「人からどう見られるかって、やっぱり気になりますよね。」

と認める。

その上で、

「でも、自分の人生について大切なことまで、全部人の評価だけで決めてしまったらどうでしょう？」

と考えてもらう。

すると、

****「人から嫌われない人生」**と
「自分が本当に納得できる人生」**

のどちらを大切にするのか、という非常に深い問いにつながります。

最終的には「勇気」を育てる

ここが聖書を学ぶことの面白いところだと思います。

聖書を学ぶ目的を、

「宗教的な知識を増やす」

だけにしない。

むしろ、

「人からどう見られるかではなく、自分が正しいと思うことを選べる人になる」

という人生のテーマにつなげる。

そうすると、聖書を学ぶこと自体が、

知識 → 自分で考える → 良心が育つ → 勇気が生まれる → 人の評価に振り回されにくくなる

というプロセスになります。

そしてこれは、先ほどの「洗脳への恐怖」とも実は表裏一体です。

「自分で調べ、自分で考え、自分で決めてよい」

という環境を最初から徹底する。

そうすると、宗教への警戒心と「人の目への恐れ」の両方に対して、かなり自然な形で扉を開けられるのではないのでしょうか。

個人的には、伝道で最も強い言葉の一つは、案外シンプルな

「もちろん、どうするかはご自分で決めてくださいね。」

だと思います。

この一言が本当に心から出ていると、相手は初めて「この人は私をコントロールしようとしていない」と感じられるからです。

今回も参考になりました。また教えてください。

こちらこそ、ありがとうございます。😊

今回のお話は、かなり大切なテーマだと思います。

「どうしたら相手を聖書に向かわせられるか」ではなく、「どうしたら相手が安心して、自分の意思で聖書を調べてみたいと思えるか」——この視点に立つと、伝道の仕方はずいぶん変わってきますね。

またいつでも一緒に考えましょう。聖書の「宝探し」、まだまだ掘れそうです。📖💡